

# 松本芳翠の書―「談玄観妙」を中心に―

栗原早紀

## 【目次】

### 序章

#### 第一章 松本芳翠の生涯と出版物

##### 第一節 先行研究

##### 第二節 生涯、著作

#### 第二章 松本芳翠の書

##### 第一節 松本芳翠の学書

##### 第二節 松本芳翠の書に対する思想

##### 第三節 書風の変遷

一九二二年（明治四五年）―一九三二年（大正二二年）

##### 第四節 書風の変遷

一九三三年（大正二二年）―一九四八年（昭和二三年）

##### 第五節 書風の変遷

一九四九年（昭和二三年）―一九七一年（昭和四六年）

#### 第三章 「談玄観妙」について

##### 第一節 作品の概要

##### 第二節 自作の弁

##### 第三節 作品評

##### 第四節 「談玄観妙」の位置付け

(一) 芳翠の書における位置付け

(二) 現代書における位置付け

### 終章

### 序章

松本芳翠（一八九二―一九七二）は大正から昭和にかけて活躍した書家である。主として芳翠は、伝統主義を尊重する作家と言われてきた。しかし、芳翠はただ単に前時代の書をそのまま踏襲していたわけではなく、芳翠なりの個性と時代感覚が作品に生かされていたからこそ、戦後の書壇においても高い評価を受けていたものと思われる。今回は、日本芸術院賞の受賞作であり、また、「墨魂の巨匠―現代の書五〇年展」に出品されるなど戦後の書壇を代表する作品の一件である「談玄観妙」に注目することで芳翠の書の特質を探った。

#### 第一章 松本芳翠の生涯と出版物

第一章では、芳翠の履歴について年譜を作成し、併せて整理するとともに、芳翠に関する先行研究、著作物等を確認した。特に年譜については既存の年譜に新しい情報を加え、より詳細な年譜を作成した。

芳翠に関する先行研究は書道関係雑誌を中心に見ることができるとともに、芳翠の書については出版物が非常に多く発行されており、特に手本類が多い。その中でも版を重ねられたものや、復刻されたものもあり、整った芳翠の書が多くの人々に求められていたことが分かる。また、芳翠の指導が分かりやすく理解しやすかったために、このように多くの出版物が発行されたのではないだろうか。さらに、作品集は展覧会の度に発行されており、芳翠の没後も遺墨展や回顧展が幾度も開催され、芳翠の評価が没後も高いものであることが分かる。

#### 第二章 松本芳翠の書

第二章では、これまでに出版された臨書手本や、書論を参考にしながら芳翠の学書の姿勢について探り、また芳翠自身の言葉の中から芳翠がどのような考えのもとで書と向き合っていたのかを探った。さらに、芳翠の書について、それぞれの作品の傾向を分析しながら、時代区分を試みた。

芳翠は、一つの古典に集中して学ぶことを重視し、楷書は唐の完成されたものを好んで学んだ。行書は王羲之の風を伝えるものを基本とし、特に趙子昂を好んで学んだ。さらに、草書も同様で、王羲之を伝えるものを基本とし、特に孫過庭「書譜」を好んだ。これらの古典の学書は芳翠の書に強く影響を与えている。さらに、芳翠は書において、気韻を重視した。また、書技術の向上には修練が不可欠であった。これは芳翠の書の特徴の一つである。

さらに、芳翠の書を三期に分けて分析を行った。第一期は師の影響が見られる書が多いが、「芳翠流」と言われる楷書の片鱗もこの時期から見られている。第二期は独自の書風の開拓に果敢に取り組み、近藤雪竹を中心とする師風から脱却した時期であるといえる。第三期は、第一期、第二期と違い、自らのスタイルの確立と変化の時期であるといえる。戦後書道界で新しい書を作りだそうとする動きが活発化する中で、芳翠も自らの書に変化を加えていったことが窺える。「談玄観妙」はその変化が発生し始める時期の作品であると思われる。

### 第三章 「談玄観妙」について

第三章では、本稿の主題にあたる「談玄観妙」に関する分析を行い、本作品の概要および評価を採った。特に、著作や芳翠が取り上げられている書道関係雑誌等に注目し、作品に対する自身の弁や、他者による評を取り上げた。その上で、「談玄観妙」が芳翠の生涯においてどのような位置付けの作品であり、本作品を境にどのような変化が作品に表れていったのかを分析した。さらに、現代書壇における「談玄観妙」の位置付けについて考察を試みた。

同時期の作品を確認すると、芳翠にとって「談玄観妙」の書風は特別なものではなく、その詩文は頻繁に揮毫したものであったことが分かった。

芳翠が「談玄観妙」を制作するにあたって留意した点は、「談玄観妙」の優れている点として鑑賞者にも理解されていた。対聯形式による余白の美や線の

安定性など長年に亘る修練の結果が表れた作品と評されたのである。

さらに、「談玄観妙」以外の作品に対する評を通して、さらに芳翠の書の特質の整理を試みた。芳翠の書は徹底した鍛錬主義のもと形成されたもので、それによって職人的であると評されている。しかし、長年の修練によって芳翠の作品は安定感と構築性の高さを手に入れている。

また、「談玄観妙」の芳翠の作品における位置付けと現代書における位置付けを試みた。「談玄観妙」は晩年に向かって書風が変化し始める時期に制作された。さらに、「談玄観妙」は戦後の新しいものを生み出そうという動きの中で、それに捕らわれずに芳翠が自らの道を歩んだ結果として生まれたものである。

### 終章

これまで論じてきたように松本芳翠の書と日本芸術院賞受賞作である「談玄観妙」を中心として扱った。

松本芳翠は戦後の書壇を代表する作家の一人である。しかし、芳翠ほど自らの軸が生涯を通して揺らぐことの無かった書家は稀有であろう。端正な楷書を書きそれを作品にすることの難しさは、現代の書道展においてそのような楷書を書いた作品が非常に少ないことから明白である。さらに徹底した鍛錬主義による学書は現代の書壇では軽視されがちであるが、鍛錬なくしては良い書を作ることはできないのである。

芳翠の書は、戦後の書壇において活発に議論され制作された表現主義的な作品とは対極の位置にある。こうした流れの中では、ともすると古典や文学といった書の伝統は置き去りにされかねない。そこから乖離することなく品格の高さを追求した結果生み出されたのが、「談玄観妙」を代表とする芳翠の表現なのである。

## 【作品研究 創作】「戴良詩 題巽上人游息軒」

《釈文》

名山鬱岩嶢 飛軒起弘敞 賞花墮檻明 忍草緣階長 日落萬壑冷 風振百泉響  
掃庭驅虎出 倚闌延月上 雲影共棲息 山光同偃仰 晚磬度筠清 夕窓含潤爽  
偶造幽人境 獲陪芳景賞 談玄悟道言 觀妙滅塵想 良游雖暫適 多累詎長往  
所以俗中人 昏昏在天壤

《法量》

二三〇・〇×八〇・〇センチ 三幅

《解説》

戴良詩「題巽上人游息軒」を行草書で制作した。修士論文で扱った松本芳翠「談玄觀妙」の本文、「談玄悟道言、觀妙滅塵想」は戴良詩「題巽上人游息軒」の一節である。論文と関連のある作品を制作したいと思い、この詩文を選んだ。三尺×八尺の紙に三行ずつ三紙に渡って制作した。筆は兼毫筆の中鋒を用い、墨は油煙墨、紙は台湾画仙系のものを用いた。日頃から行草書に集中して取り組んでおり、米芾の書風を意識し、米芾の特徴である重厚感のある線と独特の造形を表現したいと思い制作した。線の強さと大胆さのある作品となることを最も重視して制作した。さらに、墨を多く乗せ、三紙の雰囲気が一されるよう意識した。運筆が速くなってしまう傾向にあるため、落ち着いて書き、渴筆の部分に無理な擦れが生じないように注意した。また、部分的に線が硬くなってしまう部分もあるので、全体を通して柔らかい線で書くことができるようにしていきたい。今後とも様々な表現や形式の作品に取り組み、鑑賞者の目を引くようなより良い作品を発表していきたい。

## 【作品研究 臨書】「米芾 吳江舟中詩卷」

《釈文》

昨風起西北 万艘皆乘便 今風轉而東 我舟十五絳 力乏更雇夫 百金尚嫌賤  
舡工怒鬪語 夫坐視而怨 添棹亦復車 黃膠生口噤 河泥若祐夫 粘底更不轉  
添金工不怒 意滿怨亦散 一曳如風車 叫噉如臨戰 傍觀鬻寶湖 渺渺無涯岸  
一滴不可汲 况彼西江遠 万事須乘時 汝來一何晚

《法量》

三一・五×五四四・五センチ 一卷

《解説》

米芾（一〇五一—一一〇七）「吳江舟中詩卷」は米芾四〇歳前後の大字の行草書作品である。米芾自作の「吳江舟中作」（五言古詩）一首を書いている。ニューヨーク・メトロポリタン美術館に所蔵されている。筆は兼毫筆の中鋒を用い、墨は油煙墨、紙は老灰紙を用いた。「吳江舟中詩卷」は一行に四文字を書いたり一文字を書いたり、大きさの異なる文字が入り交ざり、大胆な作品であり、このような点に惹かれたため制作した。米芾独特の重厚感のある線を再現できるように意識した。最も重視した点は文字の大きさが小さいために大きい作品とならないようにすることである。また、始めから終わりまで気持ちよく途切れることなく、文字の雰囲気が一されるように意識した。今後の課題は、大きさの小さい文字でも生き生きとした線の強い文字が書けるようになることである。また、潤渴の変化など細部に渡って自然な作品を制作できるように努めていきたい。今回の制作を生かし、卷子形式の創作作品にも取り組みたい。

【創作】戴良詩 題巽上人游息軒

名山禁對坐嶠水軒起和敬覺  
 花望檻明忍字緣階七日落葉  
 聲沙風振瓦瓦聲掃庭驅虎  
 等河園起月上雲影共接息光  
 月任仰魄如夜宿法夕窗含  
 洞壑偶造幽人境獲悟芳景索  
 鼓主悟返玄觀妙滅塵想良  
 游羅暫道多異詎長往所以  
 俗中人昏在王壤

十歲丙申孟夏戴良詩書  
 於海虞西阜

【臨書】米芾 吳江舟中詩卷（一部）

舟工共聞  
 諸夫坐視  
 而然添  
 棹亦沒  
 車  
 賞膠生  
 燕口河泥  
 多粘夫  
 粘履更  
 不轉添金  
 石魚意  
 海然亦為

軍嵐  
 車  
 敢如龍  
 我  
 傍觀  
 雲湘沙  
 岸一滴  
 不可級  
 况彼西  
 江子